

熊押猿押物語

おごう 小川製品事業所

安芸管轄 仙谷事業所の終山に伴い、S24、25年にかけて、小川事業所への移転が行われた。小川川沿いに森林軌道が伊尾木貯木場まで敷設されており、事務所は花より11km、猿山の付帯はさらに2km上流の谷間にあった。職員約60、トウワラなどの天然林の木の生産や木炭の生産が盛んに行なわれていた。4林班に天然林は少なかったが、3林班、5林班では優良な天然林や旧藩道林を製品生産した。軌道終点にはインクラインと山内索道を組み合わせて高度をかせぎ運搬していた。今、林班に残る細長い樹帯はインクラインの跡。林内にも軌道跡などが残っている。

当時の暮らしは、独身者には共同飯場があり、自家発電による電気が通る。ラジオ放送も聴くことができた。ちなみにNHK第1は入らな。NHK鹿見島とラジオ放送が受信できたという。当時のラジオは1台1200円程(日給400円、日曜日の休日は比較的早く、工賃日には自動で自転車で帰宅して下り、安芸211が飲み、月曜日は3時起床して小川へ戻り山仕事をしていた。小川事業所は、S33年終山して、山内の松谷事業所へ移転していた。

大久保生れの精太郎さんは、小川から実家へ戻る際は、小川→種ヶ谷の瀬→ハツ杉森→橋八町の歩道→杉谷山→エダ保。またはハツ杉森→馬路境→橋ヶ谷→エダ保。途中、走ったりもしたが、2時間程で行き来していた。信じられぬくらい驚きの脚力だ。

奈比賀の由来
熊押、猿押一体は安芸市大字奈比賀。奈比賀は「並川」とも記されていた。小川(おごう)川、伊尾木川、名村川が並び流れることに由来する。



藤内 丘陵の上の平地
戦後同族が入りて農業や酪農を営んでいた。小川山中腹には水が引いていた水路跡があり、水と道が手摺りのトンネルは残っている。今は道路のような道が入り込め、折々は柚畑となっており、番犬が何匹も飼われ、柚子畑を守っている。ここに入植していた人たちの多くは、奈比賀小学校藤内分校が、S29年に開校。時代が移り南拓道の山とともに、S41年分校となる。柚子畑の中に、そこだけ杉の木が、一列に並んでいるところが学校跡。



精太郎さんが仙谷や小川で働いていた頃は「朝は朝星、夜は夜星」というような働き方であった。おごうの山には、行なっていた。

木炭車
森林軌道と並行して、猿山の動力は、資源の乏しい山で日本人が考案した木炭車であった。炭を燃やして早朝より制動力が木炭をつめて、ガスを発生させて動かしていた。(クワシーと同じ原理) 戦後しばらくして、ディーゼルに移る。(トウワラバスなど全木炭車に)

この山城は安芸担当管内。S30、40年代、安芸管轄には、安芸、大井、明夜島、井ノ口の5つの担当があり、管内事務は、よりキチンと森管理が展開された。



安芸管轄 0Bの 木田 精太郎さん(伊尾木川) 当時の暮らしを伺い 記しました。 2017.5

朝は朝星 夜は夜星

小川川はウチギヤツユの宝庫だ。

一人一日六合と たらぬくらい 食っていた。 コメ、麦、外米が 主食。

食料は毎日 森林軌道が 伊尾木から ばらまいた ので、こまる ことはなかった。

猿多し杉

猿押山に樹令500数十年、胸高直径5.6m、樹高46mの猿多し杉とよぶ大樹あり。数十年前までは猿押山、熊押山は猿多し山、熊多し山と呼ばれた狩猟地であった。平家一族、小川左馬之進主従数名は子田町小川箱谷の里に落ちのび、狩猟として生計を立てていたが、ある時、家来の一人が主の怒りにふれ、この猿多し山に分け入り、自らで果てた地があるという。それ以来、ここを通る人は必ず不思議なことが起こるので、その霊を鎮めるために、小川川を作り杉を植えて示したものであるという伝説がある。

